

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 岩田 圭一

アリストテレスは、『形而上学』ZH巻において、感覚的事物の実体は本質・形相であると論じている。その論は極めて難解で、その解釈をめぐる現代の欧米の研究者たちの間で白熱した議論が展開されている。本論文は、その議論を踏まえた上で、テキストの綿密な読解に基づいて一つの新たな解釈を提示するものである。

『形而上学』における実体論を理解するためにはその出発点となった『カテゴリー論』における実体論との関係を解明することが重要であるが、両者の関係に関しても研究者たちの間で解釈が分かれている。筆者は、『カテゴリー論』における個体実体優位の存在論が『形而上学』では形相優位の存在論に取って代わられたと解釈する。その意味を明らかにするために、まず第I章において『カテゴリー論』における実体論が解明され、第一実体が「属性が度外視され、かつ或る特定の種(類)に帰属する限りの個物」と規定される。

第II章では、『形而上学』ZH巻の実体論における実体は『カテゴリー論』における第一実体とは異なり、「属性が度外視され、かつ或る特定の普遍が具現されている限りの個物」と規定される、という解釈が示される。そして、そのような実体の存在根拠としての〈実体〉が本質とされていることと、実体と本質の同一性が証明されることの意味が解き明かされる。

だが、アリストテレスは〈実体〉を本質と規定することで満足せず、更に質料と形相という観点から〈実体〉の内部構造に立ち込んだ解明を進める。そこで筆者は、まず第III章において、『自然学』における生成論に手懸りを求めて、「質料」概念は生成を通じて存続する基体としての質料に由来するものであることを明らかにする。その後、第IV-VI章において、質料と形相と結合体の身分と関係がさまざまな観点から掘り下げられる。

第IV章では、定義をめぐるアリストテレスの論述に基づいて、本質は形相であり、その定義には質料的要素は含まれないということと、結合体にも定義があるがそれは結合体の内部構造を語るものであって本質の定義ではないということが示される。第V章では、形相はさまざまな仕方(すなわち、質料を限定するという仕方、質料に帰属するという仕方、質料的諸要素を一つの全体にまとめるという仕方、目的因という仕方)個別的な結合体の存在の原因である、ということが示される。第VI章では、結合体の一性の問題が取り上げられ、結合体における質料と形相の関係が可能態と現実態の対概念によって説明されていることの意味が解明される。

本論文は、難解な『形而上学』のなかでもとりわけて難解なZH巻に取り組み、欧米の研究者たちのさまざまな解釈と格闘しつつ、多くの点で筆者独自の解釈を打ち出したものである。論述は明快で説得力があり、内容も高い評価に値する。よって、本審査委員会は本論文が博士(文学)の学位を授与するに値するものと判定する。